冷徹副社長との一夜の過ちは溺愛のはじまり

真蜜綺華
Ayaka Masamitsu

Eternity
BUNKO

目次

冷徹副社長との一夜の過ちは溺愛のはじまり　5

書き下ろし番外編
賢正さんの牽制　329

冷徹副社長との一夜の過ちは
溺愛のはじまり

第一章

株式会社グローイングリゾートの二十二階建て自社ビルの中層、十一階にある広報部フロアの一角で、高成賢正（たかなりけんせい）は眉間に不機嫌を刻み、大きな溜め息を吐いた。

腕を組んで広報部マネージャーと対峙する立ち姿は、重苦しい空気の中であっても見る者の目を引く。

賢正の祖父にあたる現会長によって設立されたグローイングリゾートは、バブル崩壊後にオフィスビルや大型商業施設などを手掛け、今ではリゾート地の復興や観光開発事業にも手を広げている国内屈指のリゾート開発企業だ。

この会社の副社長が、今まさに立腹中の彼だ。

百八十を超える長身を、オーダーメイドのスーツがスタイリッシュに引き立てている。ヘアスタイルもきっちり整い、シルエットに乱れはない。

完璧な頭身を見上げると、意思が強そうで怜悧な目元と、滑るような鼻梁（びりょう）を備えた精巧な美顔が現れるのだから、仕事中にうっかり見惚れても許してほしい。

「会社の発展に一役買えるなら、と引き受けた取材のはずだったんだが」

そんな眼福な罪を撒き散らす彼は、明らかに声をピリつかせている。

普段から冷淡な印象だったが、今はそれに拍車をかけて恐ろしい。

「まずあのお粗末なインタビューはなんだ。目新しさも中身もない、わざわざ貴重な時間を割いてまでやる必要があった取材だと思うか？」

「い、いえ……あれはさすがに私も……」

いつものんびりとした雰囲気の丸眼鏡のマネージャーが、賢正のただならぬ怒りを前にまるでライオンに噛みつかれんばかりの子犬だ。

「しかも、俺のパーソナルに触れたところで会社の利益になるとは思えないと事前に伝えていたはずだが、よくもいけしゃあしゃあと女の好みを聞けたものだな、あの女記者は」

「先方には、プライベートな質問はＮＧだとお伝えしていたのですが……」

静まり返った広報部内に、再び溜め息が響き渡る。

ごくりと唾を飲み込む音ですら聞こえそうな空間で、賢正の黒い瞳が、マネージャーの後ろに控える三条陽奈美（さんじょうひなみ）に突如向けられた。

見目麗しい尊顔に捉えられ、反射的に頬を染める。

その反応に切れ長の目元が苛立ちに歪み、鋭さを増した眼光に貫かれた陽奈美は一瞬で硬直した。

「浮ついた気持ちで業務に当たる担当は付けるなと言ったはずだ」
そう言われても、顔が赤くなるのは不可抗力だ。
彼の完璧過ぎる容姿に、心をくすぐられない女はいないだろう。
自分の反応を猛省しつつも、陽奈美は異議を唱えたかった。
「そもそも、インタビュアーは編集長クラスの機知に富んだ男性をというのが取材の条件だったと記憶しているが？　ミーハーなことしか聞けない新人を寄越すとは、うちの会社も舐められたものだな」
睨まれながら言われた言葉は、今回の取材を任された陽奈美を直撃する。
取材中には一切見せることのなかった眼光の鋭さ。
『ノーコメント』とにこやかに返答していた彼の苛立ちは、今まさに女性記者の代替として陽奈美に向けられている。
彼がこれほど怒っているということは、やはりあの噂は本当なのだ。
女嫌い。
この見てくれでいて、甚だもったいない。
婚約者がいて、その女性以外は受け入れない一途さだとも一部では囁かれているが、陽奈美に向けられる憤懣に満ちた眼差しを見ると、本当に女嫌いなのだろう。
しかし、陽奈美としても、あの女性記者と一括りにされたくはない。

大学卒業後グローイングリゾートの広報の職に就いて、勤続年数は六年を超えた。
社内報はもちろん、外部へのプロモーションなどの大きな業務を任されることも多くなってきた。
陽奈美は、今回の雑誌取材を自身のキャリアアップの一環として、一からプランニングして今日を迎えたのだ。
「自分のパーソナルを晒して客寄せパンダになるつもりはない」
「申し訳ございません。今日の取材については雑誌発売前に原稿の確認を徹底いたしますので」
「当然だ」
賢正は目を伏せ、マネージャーの対応を受け入れた。
すると彼の背後から「副社長、お時間です」と秘書の瀧が、柔和な声で凍り付く空気を変えた。
元は賢正の父である社長の専属秘書をしていた彼だが、数年前からは賢正の片腕として働いている。常に冷静沈着に物事を見極めることのできる優秀な人材だ。齢は四十を超えていて、賢正に引けを取らない端整な顔にはファンも多い。
「すまない、行こう」
尖っていた賢正の声を丸く収めてくれた瀧に部の全員が感謝をしつつ、退室していく

後ろ姿に一堂揃って「お疲れ様です！」と礼をする。
凍った空気が彼らとともに流れ出たあと、弛緩するようにあちらこちらで安堵の溜め息が広がった。
「申し訳ありません、マネージャー。私がもっと念入りに確認をしておけば」
九十度のお辞儀をする陽奈美は、今回の雑誌取材においての責任を感じていた。
マネージャーが賢正に告げた通り、女性記者は寄越すな、内容も硬派なものを、と先方にはわりと強めに話していたのだが、やってきた記者は明らかに賢正に私的に近づきたがっていた。
「三条さんのせいじゃないよ。僕もまさか、あんな軽い感じの取材になるとは思わなかったから」
陽奈美は「申し訳ありません」と再度謝罪の意を伝える。
ひとまず原稿の確認だけはきちんとやって行こうというマネージャーのフォローを受けてから、インタビュールームの後片付けに向かう。
正直〝舐められた〟のは、会社ではなく陽奈美だろう。
打ち合わせのやり取りをしていたのも、あの女性だった。
間延びしたような返事が、最初から引っかかっていたのだ。
サンルーム仕様になっている外部対応専用の部屋で、丸テーブルに置き去りにされた

取材用のレジュメを集める。
自分で作ったそれを拾いながら、取材のアポイントを受けたときに、マネージャーが陽奈美を担当に抜擢してくれた数週間前を思い出す。
（こんなはずじゃなかったのに……）
初夏の陽光を目いっぱいに取り込む明るい部屋で、先ほどの誰とも意味の違う溜め息を零した。
会社の顔と言っても過言ではない広報部の仕事。
やり甲斐はもちろんある。けれども、会社の対外的な評価をダイレクトに受ける重要なポストだから、ミスやトラブルは許されない。
賢正のずば抜けて秀でた容姿を活用しない手はなくて、当然それは彼自身も受け入れている。
だからこそ、プライベートな質問をぶつけられても営業スマイルでかわしてみせた。
副社長である彼に気を遣わせないといけない状況であったことが、陽奈美の自尊心に相当なダメージを与えていた。
（しかも、私までミーハーだと思われたみたいだし）
高校こそ男女共学の世界を生きたものの、女子校生活の長かった陽奈美にはあのレベルはまだまだ刺激が強すぎる。

さらにあの眼光で貫かれたのだから、卒倒しなかっただけましだと思うのに。
終わってしまったことをいつまでも嘆いてもキリがないと、唇を噛みしめて軽く清掃したインタビュールームを後にした。

＊

発売前に記事を必ず確認させてほしいと、角が立たないように御礼を兼ねた連絡をした。
消化不良でありながらも、大仕事が一段落した解放感は素直に受け止めたい。
ようやく迎えた休日の土曜日。
陽奈美は午前中から自宅マンションを出て、電車で三十分ほど離れた実家へと向かった。
大きな戸建ての建ち並ぶ住宅街には、なだらかな坂が多い。
勾配のある道のりと最寄り駅からの距離を鑑みると、タクシーで向かうのが利口だ。
駅前で拾ったタクシーに揺られ、ほどなくして、二階建ての建物を覆い隠すほどのモダンな石積みの塀が見えてきた。
道をなぞるようにしなやかな曲線を描いたその先に、見覚えのない黒光りするセダン

が停まっていた。
陽奈美の母・朱美は車を所有していない。実家のものではないとなると、来客があったか。
しかし、土曜の午前中、今はまだ十時を回らない時間だ。
こんなに朝早くの来訪を怪訝に思いながら、陽奈美は自宅の敷地の手前でタクシーから降りた。
我が家ながらも、恐る恐る木製のシャッターの閉まるガレージに近づいていく。
すると、ガレージ脇の塀の奥から誰かが出てきた。
「今日はありがとうございました」
「とんでもないことでございます。それでは失礼いたします」
礼を言うのは朱美の声だ。
一方、とても丁寧な物腰でどこかで聞き覚えのある男の声が答えた。
次の瞬間、車に歩み寄ったその声の持ち主を見て、陽奈美は驚愕した。
（あれって、瀧さん!?）
見間違えるはずがない。賢正の秘書だ。
休日のはずなのに会社で見るのと変わらないスーツ姿に、瞬きを忘れる。
車に乗り込む彼を見届ける朱美の横顔は、心なしか上気しているようにも見えた。

年齢こそ五十を迎えたばかりだが、我が母親ながら昇る朝陽に照らされる姿は美人の部類だと陽奈美は思う。

しかし、独身とはいえ朝帰りをするほど奔放なのには娘としては複雑で、世間体も気になるところだ。

走り去る車に頭を下げて見送った朱美は、名残惜しげに行く先を見つめる。

溜め息を吐いて陽奈美のいる方へと向き直ると、はっと目を剥いた。

「あ、あら、おかえりなさい」

「ただいま」

突然の娘の帰宅に戸惑う朱美は、咄嗟にその表情を笑みに変える。

狼狽えてしまう朱美の心境を察し、陽奈美は少しがっかりした。

朱美は今でも父だけを愛していると思っていたからだ。

父が亡くなって十四年、もちろんもう新しい人生を考えても何も悪いことではない。

ただ、陽奈美が自立を考え実家を出てからというもの、淋しいからなのか、朱美は夜遅くまで出歩くことが多くなった。

「今帰ったの？　さっきのって……」

朱美に向ける語気が少々きつくなってしまった。

怪訝に眉を寄せてしまったことを自覚し、ふと昨日の賢正の険しい顔を思い出して内

心身震いする。

「わざわざ送っていただいたの。陽奈美の会社の秘書さんでしょう？　あちらのおうちの方にお呼ばれしてお話が盛り上がっちゃったから、お泊まりさせてもらったのよ」

陽奈美の訝しげな様子を、朱美は持ち前の可愛らしさで緩和しようとする。

にこにこと無邪気に微笑む彼女に、陽奈美は諦めたように嘆息した。

「まあいいけど。もうすぐ田村さんが来る時間なんじゃない？」

「そうなの。だから朝食もそこそこに帰らなくちゃいけなくて、申し訳なかったわ」

朝食までご馳走になったのか、と零す溜め息もなく、自宅へと戻る朱美の後に続いた。

毎週土曜日の午前中、朱美がひとりで住む実家にはハウスキーパーがやって来る。

掃除くらい自分でできそうなものだが、何せ陽奈美の実家は辺りの住宅にも負けず劣らず豪邸だ。

生粋のお嬢様育ちの朱美が、いくつもある部屋の掃除に手も気も回せるはずがない。

資産家である陽奈美の祖父から受け継いだ邸は、父が健在の時に改修したものの、やはり女ひとりで維持できるような代物ではないのだ。

小さく軋んで開く大きな玄関扉をくぐりながら、陽奈美はスリッパに履き替える朱美の背中に声をかけた。

「うちの不動産営業部でも取り扱いしてくれるって言ってたよ？　グローイング経由な

ら、いい家主さん見つけてくれるよ」
「嫌よ、絶対」
振り向かないままリビングへと向かう朱美は依然、頑として譲らなかった。
ひとりで暮らすには持て余すこの家を手放し、その資金で都内のセキュリティの万全なマンションにでも一緒に移り住もうと持ちかけて早数年。
朱美は陽奈美の話に耳を傾けようとはしなかった。
ハウスキーパーだってただではない。
石塀に囲われた木々の茂る庭だって、定期的に庭師に手入れをお願いしている。
働かなくても有り余る資産の運用で食べていけるとは言っても、無駄に広い家だ。
結婚願望のない陽奈美には、跡取りの期待もできないというのに。
朱美が再婚するというのなら話は変わるけれど。
「さっきの瀧さんとは、どういう……」
「彼は送ってくださっただけよ」
グラスをふたつ用意しお茶の用意をしながら、朱美は食い気味に答えた。
つんと澄ましているけれど、さっきの後ろ姿を見たら送ってもらっただけのようには感じられなかった。
それを陽奈美が突っ込む前に、ぱっと顔を輝やかせた朱美がお茶を注ぎながら捲(まく)し立

てる。
「そう！　それでね、あなたに話すことがあって。瀧さんが秘書をしている高成さん。あちらのおうちの方とは昔お会いしたことがあるんだけど、陽奈美は覚えているかしら。お父さんと昔よく行っていた別荘のご近所さん。お父さんが亡くなった年に行ったのが最後だったから、十四年前になるわね」
「え⁉　〝あちらのおうち〟って瀧さんのことじゃなくて、うちの会社の社長の家のことなの⁉　お邪魔してたのは、社長の家⁉」
聞き捨てならない苗字が出てきて、ソファに腰かけようとした陽奈美は声をひっくり返して驚いた。
なんてタイムリーな。こんなに立て続けに賢正との関わりが出てくるのかと青くなる。
昨日の反省は十分にしたものの、立腹した彼の様子は若干トラウマになっているところだ。
しかも、朱美は今何と言った？
（十四年前に親交があった？　高成家と？）
そうは言うものの、賢正の方も陽奈美を知っている様子はなかった。
一社員として、しっかり叱咤されている。
だが、遠くに追いやっていた記憶から、不意に朧(おぼろ)げな影が蘇(よみがえ)ってきた。

夏の夜。

どこかの家のバルコニーで見た大輪の花火。

あの日は、たしか隣に誰か居たような気がする。

「そうよー。凄い偶然でしょう？　私もすっかり忘れていたんだけど、先日たまたまお呼ばれしたパーティーで会って。近況報告も兼ねて改めて昨夜お誘いいただいたのよ。それでね、陽奈美」

驚きからの脱力でソファに沈む陽奈美の前に、綺麗な色の冷茶を出した朱美は両手を合わせて名案とばかりに目を輝かせた。

「高成さんのご子息とお見合いしない？」

霞がかった過去の情景を手繰り寄せようとしているところを、可愛らしくころころとした声に振り払われた。

お茶に伸ばした手が、その瞬間に目的を忘れる。

（は？）

大きな疑問符が陽奈美の周りに散らばる。

「高成賢正さん。前に会った時は高校生だったのよね。その時もイケメンだと思ったけど、ますます魅力的になられていてキュンとしちゃったわ。あんなに素敵な方なのに、まだご結婚なさってないなんて」

朱美が頬を染めて何の話をしているのか、理解が追いつかない。

（見合い、と言った？　誰が？　誰と？）

「陽奈美もそろそろ将来のこと考えてもいい年なのに、ちっともその手の話が出てこないんだもの。ちょうどいい機会だからって、先方も快諾してくださったわよ」

「ちょ、ちょっと待って！　お見合いなんて、どうしてそんな勝手に」

どうやら自分の見合い話だと気づき、寝耳に水のそれがすでに進行しているらしい様子に青ざめる。

「悪い話じゃないわよ。ちゃんとしたお家柄だし、賢正さんは素敵な方だし、私としても安心」

「そうじゃなくて」

見合いどころか、結婚のけの字すら考えたことがない陽奈美に、朱美は優良物件とばかりに太鼓判を押す。

するとそこへ、リンゴンと無駄にゴージャスな自宅の呼び鈴が鳴った。

「あら、田村さんね」

リビングのアンティークな柱時計を見やってから、言いたいことを言い切った朱美はすっきりした顔で立つ。

スキップしそうな後ろ姿を唖然と見送り、文字通り陽奈美は頭を抱えた。

（副社長とお見合い!?　いやいやいや、ないでしょう。ありえない）
まざまざとよみがえる昨日の鬼の形相。
怖すぎる。
それに、仕事一筋と揶揄される賢正が、見合いを快諾したというのも信じ難い。
それなら相手が自身の会社の社員であると知らない可能性はある。
いや待てよ。
そもそも彼にはすでに婚約者がいたはずだ。
どちらにしても、陽奈美自身に結婚願望がないのだから、これは断る方向で話を締めるべきだ。
「いえ、ですから……」
遠くから朱美の困った声が聞こえてきた。
ハウスキーパーの田村が来たのではなかったのかと聞き耳を立てると、朱美が相手をしているのはどうやら男性のようだ。
様子が気になるが、この家から離れてもう五年の陽奈美が割り込めるほど事情はわからない。
「あっ、田村さん。お待ちしてました。……申し訳ありません。これから、忙しくなるものですから」

田村の到着を歓迎する朱美に、「大変失礼しました」と丁寧な口調で男性が詫びる。
営業セールスか何かだったのだろうかと、陽奈美は冷たいお茶で先ほどまでの話を喉に流す。
「そうなんですよ、先日から何度も」
リビングに戻ってくる朱美は、後に付いてくる田村に何やらぼやいていた。
「男手がないから甘く見られているのかしら」
「そうですねえ」
「はあ、陽奈美がお婿でも取ってくれたら安心なのに」
戻るやいなや自分の話に繋げられ、陽奈美は含んだお茶を噴き出しそうになる。
んぐっと無理矢理飲み込んだ。
「お、お婿って……」
「陽奈美さん、おはようございます」
振り返った陽奈美に、小柄な田村がエプロンを手に丁寧に頭を下げた。
「おはようございます、田村さん。いつもありがとうございます」
恐れ入ります、とシワの多くなった笑顔を返してくれる彼女は、陽奈美が物心つくころから世話になっているハウスキーパーだ。
「田村さんもそう思わない？　三条家の名前は継がなくてもいいから、うちに入ってい

ただけるだけで安心なのにねえ」
そうですねえ、と話を合わせる田村は、にこにことエプロンを身に着けテキパキと仕事に取り掛かった。
陽奈美を気遣って、田村は別の部屋の掃除に向かう。
再び母娘だけになったリビングで、朱美は嬉々として話を戻してきた。
「どう？　お見合い」
「無理」
即答する陽奈美にめげず、朱美は隣に腰掛けてくる。
「どうして？　あちらも乗り気なのに」
「勤めてる会社の副社長だよ？　あっちだって、社員とお見合いなんて気まずくてしょうがないと思うけど。だいたい、副社長は私が自分のところの社員だって知っているの？」
「知っ……ているはずよ、きっと」
なんだその間は。
しかも目を逸らしたぞ。
人差し指を顎に当ててぶりっ子しても、誤魔化されない。
なんだか歯切れの悪い回答に、訝しく目を細める。
昨日の今日だ。なんなら朱美がその話をしてきたのが昨日のことなら、まさに当日叱

責した相手との見合い話を、果たして彼が快く受けるだろうか。
見合い話自体が社交辞令か、もしくは相手が社員だと知らないか。
「私、結婚は考えてないから」
「ほらぁ、すぐそんなこと言う」
そもそもだ。陽奈美はかねてより、自立志向が強かった。
愛する人、家族が居ることは素晴らしいことだと思う。
けれど、それを失くしたときの悲しみは、もう二度と味わいたくない。
それに、最愛の夫の死を振り切るように頻繁に遊びに出かけるようになった朱美は、陽奈美の目には痛ましくさえ見えた。
朱美のことは大好きだけれど、彼女のようにはなりたくなかった。
有り余る財産で生活し、独りになると遊んでばかり。
悲しみを乗り越えるためだとわかってはいるけれど、目的のない日々は、生きる活力を見出せないと思った。
中学までは彼女と同じお嬢様学校に通っていたが、高校はちゃんと受験をして父と同じ学校を選んだ。
大学進学や就職を目指す友人に囲まれ、刺激を受けた陽奈美もやがて自分で何かを成し得ようとする生き方にとても魅力を感じるようになった。

ひとりでも生きていける。そんなふうになりたかった。
「ひとりで生きるのは、淋しいわよ」
陽奈美の尖った声を聞いて、朱美は悲しげに微笑んだ。
「陽奈美には、ちゃんと幸せになってほしい」
母の言葉は重みが違う。
でもそれは、一緒に生きると決めた人が居たからだ。
なのに居なくなってしまった。
それなら、最初からひとりで生きると決めていれば、そんな悲しい思いをしなくて済む。
これまで恋人を作ろうと思わなかったのも、いつかきっと別れの時がやってくるとわかっていたからだ。
「私は今でも十分幸せだよ」
何をもって幸せとするかは、自分以外の誰にも測れないことだ。
「でもお見合いはしましょう？　もう日程も決まっているし、今さら断ってあちらに恥をかかせるのは悪いじゃない」
さっきまでのしおらしさはどこへ行ったのか。
合わせた手を首と一緒に傾げて、きゅるんと愛らしく笑む五十路の朱美。
首尾よく話をまとめているが、それは本人の意思とは関係の無いところで勝手に取り

決めたことではないかと呆れる。
けれど、賢正に恥をかかせるとあっては、陽奈美としては捨ておけない。
快諾されたらしい見合いを断ったあと、会社でどんな顔をすればいいのか。
あの威圧感と、プライドの高そうな彼の前で平然としていられる自信はない。
結婚する、しないは別として、あちらの顔を立てるために見合いだけでも受けておく方が無難かもしれない。
「あちらはお見合いする気なのよね？」
「もちろんよ」
はあと覚悟の溜め息を吐く。
「いつ？　場所は決まってるの？」
自立のために母親をひとり残して家を出た手前、少しくらいは親孝行しなければという義務感も手伝った。
「言っておくけど、結婚するかしないかは自分で決めるから」
「ええ、構わないわ」
しないけど、とは言わず、喜ぶ朱美に免じて話にだけは応じよう。
はっきり断るのもまた恐ろしいことのような気がするが、あちらに気に入られなければいいだけの話だ。

あくまで自然に、縁がなかったと思ってもらえればいい。
奥様、と呼ばれる朱美の背中に少しの罪悪感を覚えるが、選択権はこちらにあるはずだ。
あの崇高で恐ろしい人の姿を思い浮かべるだけで緊張する。
見合いの場で叱責を食らうとは思わないけれど、やはり陽奈美にとって彼は畏怖の対象であった。

＊

十四年前。陽奈美が両親に、高校は受験をして都内の学校に行きたいと打ち明けた中二の夏。
朱美は幼稚園からの大学附属高校に行かせたがったが、父は自分がそうだったように陽奈美が行きたいところに行けばいいと認めてくれた。
陽奈美は父の通った高校に憧れていた。
幼稚園から顔ぶれの変わらない学校への進学も悪くはないけれど、もっと違う世界を見てみたいと、漠然とした憧れを抱いていたのだ。
受験は甘くないと父にも教師にも念を押されていたその頃。
例年、三条家所有の別荘で余暇を過ごしていたのだが、その年は初めて近くにある別

の所有者の別荘へ招かれた。
近くといっても歩いて数分はかかる。互いの別荘が見える位置にはなく、双方のプライバシーは守られていた。
故になかなか顔を合わせる機会はなかったのだが、何がきっかけだったのか当時の陽奈美は知らないまま、高成家と夕食を共にすることになった。
覚えているのは、三条家より広いリビングで食べたパエリアと、夜空に大きく花開いた打ち上げ花火。
談笑する二家族の中でも、互いにひとりっ子だった高成家の息子とは少し話したような記憶がある。
それまで、父や教師以外の異性とほとんど関わってこなかった陽奈美にとって、高成家の息子は緊張の対象だった。
薄暗がりだったこともあり、直視できなかった彼の顔はほとんど覚えていなかった。
（昔一度会ったことがあったなんて……入社したときも、全然気づかなかった）
記憶に残っていなかったのには理由がある。
別荘から帰ってすぐ、父が急逝した。
脳梗塞だった。
泣き崩れる朱美に、寄り添うのが精一杯だった。

夏の想い出を振り返る余裕なんてなかった。
そして、泣いてばかりで何もできなくなった朱美を見て、大切な人を失うことが怖くて仕方なくなったのだ。
だから、恋人は要らない。結婚なんてしなくていい。
そう思っているのに、陽奈美は今、ザ・お見合いの格好でフレンチレストランの一角に座っていた。
湾曲したガラス窓の外で、梅雨の晴れ間が青く澄んでいる。見下ろせば都会のビル群が堅苦しく寄せ集められ、土曜の昼間も気を抜けずにいるようだ。
手元に視線を移せば、天気に見合う爽やかな淡い水色の着物が陽奈美のありもしない気合いを物語っていた。
「昔も随分美人なお嬢さんだと思ったけれど、大人になってますます磨きがかかりましたねえ」
「そうでしょう？　自慢の娘ですから」
大きな丸テーブルの隣同士でうふふと笑い合うふたりの母親。
朱美の隣で髪をオールアップにまとめた淑女は、賢正の母・叶恵（かなえ）だ。
彼の黒髪は母親譲りなのだろう。
朱美とは違う種類のクール系美女だが、話す雰囲気はなんだか姉妹のようにそっくりだ。

これは意気投合するのも頷ける。
「ごめんなさいね、陽奈美さん。息子は何かと忙しくて、ギリギリにしか来られないみたいなの」
「いえ、私は全然構いません」
とは言いつつ、早朝から着付けとヘアメイクに時間を取られ、朝食べたおにぎり一個はもう腹の虫を治めきれなくなっていた。
引き締められる帯は苦しいし、型崩れしないように姿勢を保つのもキツい。
（せめてワンピースが良かったのに……）
朱美が自分の着物を着せたがって譲らなかった。
父との結納でも、これを着たのだそう。
そう言われてしまっては、見合いを成就させようとは思っていない手前邪険にできなかった。慣れない息苦しさは静かに息を吐いて堪えるしかない。
目の前には真っ白なクロスの上にシルバーのカトラリーが上品に並んでいる。
早く食事を済ませて、ここを出たい。
この場限りの見合いだ。
特別何か気に入られようとする必要はないのだから、早く終わることだけを考える。

円形の広いフロアには、大きなテーブルが数卓しかなく、他の客との距離もあって話し声は気にならない。
高い天井に悠然とぶら下がるシャンデリアが高級店の象徴のように煌めく中、入り口の方から「いらっしゃいませ」という声が聞こえた。
店内へ入ってくる人影に母親ふたりが気づき、嬉々として立ち上がった。
彼女らに倣い、腰を上げて振り向くと、ギャルソンに率いられる長身の男性がこちらへ向かって闊歩していた。
少し俯く目元はシャープで、通った鼻梁が美しくその顔を引き締める。
相変わらず均整の取れた躯体をダークグレーのスーツに包み、見る者を魅了する。
うっかり見惚れる陽奈美と、まだ少し離れたところにいる賢正の目線がかち合った。
植え付けられた緊張にどきりと胸を打つ。
そして、雌の本能に抗えないときめきに頬が熱くなる。
その途端に彼は歩みを止めた。
「待っていたわよ、賢正」
「こんにちは、先日はお世話になりました」
声をかけるふたりに、賢正はじわりと視線を移した。
「どういうことだ」

彼が最初に発した言葉は挨拶などではなかった。
瞬間、陽奈美は察する。
（見合いを快諾したなんて、嘘だ）
陽奈美の姿を見て、驚いている。
彼は、見合いだと聞かされずにやってきたのだ。
彼の低い声に、先日の叱責を思い出す。
怒らせようと思ったわけではないのに、自分がその一端となっていることは間違いない事実だ。
謝ろうにも、眉間に深く刻まれる皺に彼の明らかな怪訝と憤懣の感情が見え、怖くて口を開けない。
「あなた、こうでもしないと来なかったでしょう。あ、瀧さんを怒るのはなしね」
瀧にも共謀させていたようだ。
あの日と同じ、大きな溜め息が広いホールに響く。
ギャルソンを下がらせ、三人のいるテーブルへと歩み寄ってきた賢正は、陽奈美を一瞥した。
一瞬だけの眼差しは相当な怒気を孕み、過ちを咎められたようで酷く気落ちする。
「結婚はしないと言ったはずだ。見合いの必要も、時間もないと」

騙されたことに憤慨している。
ここが会社ではないことがせめてもの救いだ。
きっと彼の戦場である職場であれば、この苛立ちに満ちた声はもっと爆発していたに違いない。
「そんなこと言わずに、せっかく時間を作ってくださったんだから、食事するだけでもいいじゃない」
叶恵はどこまでも朗らかに、見てわかる彼の苛立ちをあしらう。
「時間を作ったのはこちらの方だ。予定していた会合を断って来た。今からでもそちらに行く」
もう陽奈美の方を見ることはなく、賢正は踵を返す。
またしても、陽奈美が原因で彼を怒らせてしまった。
正確には、今日の事情をきちんと話していなかった叶恵の所為だが、言われるがままのこのことやってきた陽奈美にも彼の怒りの矛先は向いているはずだ。
しかも別の会合を断ってまでここへ来た彼に、気に入られなければいいという軽い気持ちでいた自分を大いに恥じた。
「ちょっと賢正。仕事も大切だけど、あなた自身のことも大切にしないと。仕事をしていく上でも支えてくれる人は必要よ」

説得しようとする叶恵の言葉は、賢正の背中に跳ねつけられる。
「こちらは構いませんよ、叶恵さん」
「いいえ、朱美さん。せっかくの十四年来のご縁なのに、こんな簡単に足蹴にされたくありませんから」
息子が息子なら母も母のようだ。
頑なな性格はＤＮＡを物語る。
「覚えてるでしょう？　あなたが高校生の頃、一度うちの別荘でお食事したことがあったでしょう。あのときの三条さん。大人びた陽奈美さんが中学生だって聞いて驚いてたじゃない」
叶恵は、奥の手でも出すように彼に投げかけた。
陽奈美はそんな昔の話に何の力があるのかと思ったが、予想だにしない反応を目の当たりにする。
席につくことすら拒否した彼が、母親の言葉にピタリと足を止めたのだ。
そして、おもむろに振り返るなり、彼の驚きに満ちた眼が陽奈美を真っ直ぐに捉えた。
「あれからずっとあちらの別荘にはいらっしゃらなかったって。十四年経って偶然再会したのは、これ以上ないご縁だと思わない？」
大きく見開いた目が陽奈美を射貫き、先日のトラウマを思い出して緊張が走る。

けれど、見た事のない賢正の動揺する姿に、血が通った人なのだと初めて彼を身近に感じた。

そしてその原因が自分との再会にあったと思うと、他の誰とも違う存在になったようで、胸が高鳴った。

彼に見られていることが恥ずかしくなり、じんわりと頬が熱くなる。

そんな自分の様子を見て、彼の表情はわずか数秒の間に驚くほど変わっていく。

何も言えずに立ち尽くすだけの陽奈美を見つめたままの目は、みるみる厭わしげに歪んだ。

「結婚はしない」

念を押すようにただ一言、それだけを告げた賢正は、もう振り返ることなくレストランを出ていってしまった。

周りの客もちらちらこちらを見ている気配がする。

なんとも言えない気まずい雰囲気に、着席を促したのは叶恵だった。

「ごめんなさい、陽奈美さん。あの子本当に仕事人間で、私生活には目もくれないのよ。マンションの部屋もちゃんと帰っているのか心配で」

「私は大丈夫です。副社長も、きっと驚かれたんだと思います。お忙しいのは私もよくわかっていますから」

陽奈美の目論見通りとはいかなかったが、結果だけ見れば結婚はしなくて済む雰囲気だ。

しかし、あそこまではっきり結婚を拒否されるとは思ってもみなかった。

そもそも朱美からは見合いを快諾したと聞いていたのに。

（なんだか私が振られたような感じになった気が……）

ほっとした気持ちもあるが、複雑だ。

「お優しいのね、陽奈美さん。陽奈美さんがあの子のお嫁さんになってくれたら凄く安心なのに」

賢正のあの様子を見てもなお、彼の伴侶として推してもらえるのは光栄なことだが、謝罪はしつつも叶恵は懲りていない様子だ。

「あの子にはきちんと話しておきますね。せっかくだし、お料理はいただきましょう」

もうこの話は落着したはずだ。

これ以上の展開はないと思い、作った笑顔で上品なフレンチを黙々と口に押し込んだ。

＊

「一応話してはみたんだけど、やっぱり直ぐに査定してもらうのは難しそうなの」

あれから数日。

いつもと変わらない毎日を過ごす中、休憩時間に不動産営業部へとやってきた陽奈美は、ランチの誘いがてらに同期の純哉と話をした。

「陽奈美のお母様のお気持ちもわからなくはないけどね」

「でも、ひとりで暮らすには大きすぎる。しかも十年以上使ってない別荘までまだ持っていたなんて」

「それは陽奈美がお婿を取って、資産全部継げばいいだけの話なんじゃない？　僕はそれが一番の解決策で、親孝行だと思うけど」

「純哉までお母さんと同じこと言わないでよ」

溜め息混じりの力ない笑いをにこやかに受け止めてくれる純哉は、見た目こそ社内でも上位クラスのイケメンなのだが、中身は陽奈美が苦手意識なく話せるくらい女子だ。

顧客の前では、自身の華を存分に活かした営業力を見せつけるやり手のイケリーマン。けれど、プライベートの彼は別人で、自分のパーソナルを隠さない彼に泣かされた女性達を何人見てきたことか。

恋愛対象が女性ではない彼との友人関係は大学生の頃からになる。

「今日の日替わりはたしか……」

純哉がスマホで社食のリサーチをしているところに、部のフロアの空気を塗り替える

人物が現れた。

営業部長と何やら真剣な面持ちで話しながら闊歩してきたのは、賢正だ。

「ヤバい、今日もイケメン」

スマホを抱きしめ、純哉は乙女な発言をする。

一方陽奈美は、先日の見合い未遂事件の日から初めて遭遇する彼に、緊張と恐怖、そして若干の気まずさを感じる。

けれど、三百はいる社員の中で、彼との接触はこれまでほぼなかった。

しっかりとあの鋭い眼光で貫かれたのは二回きり。

レストランでだって、自社の社員と気づいた様子はなかった。

仮にあのあと陽奈美が社員だと聞かされていたとしても、あの拒否の仕方を見れば、顔を覚える以前の話だと思う。

陽奈美が平然としていれば、賢正が気づくはずはない。

そう思っていたのに――

ランチに出る社員達がいちいち彼らの横で立ち止まり、話し込む賢正と営業部長に挨拶をしていく。

その流れに紛れ早くこの場を離れたくて、賢正に見惚れる純哉を置いて足早に通過する。

「お疲れ様でぇす」とか細い声で頭を下げたところで、真剣な話をしている最中の賢正が、ふと会話を止めた。

何の沈黙か自分には関係の無いものだと彼らの脇をすり抜ける陽奈美は、突き刺す視線の気配を感じた。

シックスセンスとはよく言ったもので、五感のどれも情報を得ていないのに、賢正の強い視線が陽奈美に向けられているとわかった。

気づかれるはずがないとタカをくくっていた陽奈美は、強い気配に思わず顔を上げる。

視線を向けたその先では、営業部長と話していたはずの賢正が、先日と同じように目を見開いて陽奈美を見ていた。

刹那、空気が止まる。

そう感じたのは恐らくふたりだけだ。

――バレている。

冷や汗が背を伝い、踏み出す足を鈍らせる。

またあの断固拒否の意思をぶつけられるのかと無意識に身構えると、瞬きもしないうちに、彼の目が細められひくりと不快そうに歪んだ。

一秒もしないほどの時間。

そのわずかな合間に、ふたりの間で起伏の激しい感情が往来した。

目を逸らすのも、逸らされるのも同時。

なぜか陽奈美を非難している気がして、モヤモヤとした後味の悪さが残る。

「ええ、たしかにグローリー開発と――」

「それがたしかなら――」

陽奈美などいないかのような彼らの会話を背中で聞く。

たしかにここで微笑んだら不自然極まりないだろうし、スキャンダルの元だ。

接点を公にしないのは正しい行動である。

それにしても、あそこまで嫌悪を露(あらわ)にしなくてもいいのではないかと思う。

(私、何かしたっけ?)

業務上の過失ならまだ話はわかる。

だが、彼のそれは、レストランでの出来事が起因となっているに違いなかった。

彼にとってあのお見合いは、陽奈美の顔を覚えるほど不快な出来事だったのだろう。

結婚を望んでいないなら、その点に限っては気が合う。

母達が目論むような展開になる可能性は一ミリだってない。

それなのに、彼のあの態度は腑に落ちない。

(どちらかというと、はっきり断られた私の方が不快に思ってもバチは当たらないはずなんだけど)

それでも彼は、陽奈美の上司だ。
副社長という圧倒的権力の持ち主。
盾つこうものなら、ここまで積んできたキャリアが頓挫しかねない。
大人しく、平和に人生を謳歌するに限る。
生涯独身と決めているのだから、仕事を失くすわけにはいかないのだ。
「はあ、一度でいいから副社長に抱かれてみたい」
うっとりと頬を染めた純哉が追いついてきた。
女嫌いの賢正なら、可能性はあるのではと思いながら、もう彼とは関わらないに越したことはないと陽奈美は密かに誓った。

第二章

「久しぶりに行ってみましょうよ、別荘」
朱美がそう言ったのは、数週間前のことだ。
陽奈美の夏休みに合わせて、十四年間足を運んでいなかった別荘にもう一度行こうと言い出したのだ。

てっきり、朱美は父との思い出の場所に行くのは辛いのではないかと思っていた。
この間の高成家の見合い未遂事件まで、チラッとも別荘のことは口にしなかったくらいだ。
辛いことに変わりはないだろうが、大切な場所だ。
「陽奈美もあの素敵な場所を思い出せば、手放すなんて考えはなくなるわよ、きっと」
陽奈美はそれまですっかり別荘の存在を忘れていた。
賢正との話がなければ、まだしばらくは思い出さなかっただろう。
自宅同様、管理会社に任せっきりの別荘もまとめて売却しようと言った陽奈美に、返ってきた朱美の回答がそれだった。
意外と頑固な彼女に押され、陽奈美は今、沿岸の道をタクシーに揺られている。
避暑地とはいえ、真夏の陽射しは強い。
けれどそれをものともせず、眼前に広がる海はきらきらと爽やかに水面を弾けさせ、都会の夜景よりもずっと雄大で神聖さすら感じる。
流れる車窓の景色がなんだか懐かしく思えるのは、少しずつ昔の記憶が蘇っているからだ。
大きなカーブを曲がったあと、その先に長く続く白い砂浜が見えてくる。
「ここ、なんとなく覚えがある」

「別荘に来た時はいつもそこで海水浴していたわよ。陽奈美が小学生くらいまでだったかな」
例年大勢の海水浴客が訪れる場所らしい。
あちこちにカラフルなパラソルが立ち、大人も子どもも浮き輪を抱えてはしゃいでいる。
「今日はここで花火大会がありますよ」
最寄り駅から送迎してくれているタクシー運転手は、ふたりに地元ならではの貴重な情報をくれる。
「あら、そうなんですか？　前に来た時もちょうど花火大会の日に当たった時があったわね。今日はなんだかいいことがありそうね」
花火大会と聞いて、陽奈美は強く思い出した記憶があった。
あれは、夏の夜のバルコニーだ。
涼しい夜風に吹かれながら、打ち上がる大きな花火を見た。
間近で花開いた絢爛（けんらん）な火花に、とても感動したのを覚えている。
「たしかあの日に高成家とお食事したのよね。リビングからでも案外近くに見えて」
そうだ。思い出した。
陽奈美が花火を一緒に見たのは、家族とではなかった。

しかも、あの日夜空を見上げたバルコニーは三条家の別荘でもなくて、隣に腰掛けていたのは――
「あ、運転手さん、そこの脇道に入っていただけますか」
「承知しました」
暗がりの中に思い出そうとした人物の姿は、朱美の声でかき消えた。
彼女の指示通り、タクシーは両側を木々に囲まれた丘の方へ上っていく。
「久しぶりね、本当に」
目を細めて外の景色に思いを馳せる朱美は、父との思い出を回顧しているのだろう。
陽奈美も忘れていただけで、林道の緩やかな坂と大きなカーブはよく知っている景色だった。
開けた場所に出ると、そこには二階建ての大きな一軒家がある。
自宅ほどまでではないけれど、コンクリート造りの建物だ。
自然溢れる景観の中に、圧倒的な違和感でそびえ立つ。
きちんと管理会社に任せていただけに、磨き上げられた大きなガラス窓が午後の陽光を跳ね返し今も現役の風格を漂わせている。
「懐かしい」
潮風の匂いを感じながら降り立った陽奈美は、別荘を見上げ思わず零（こぼ）した。

「思い出してくれた？　あっ、すみません」
誇らしげに言う朱美は、運転手が下ろすスーツケースを慌てて引き取る。
一泊二日のふたり分の荷物は、前来た時よりもぐっと少なく感じた。
タクシーを見送ってから、十四年ぶりの別荘へ足を踏み入れる。
中は適温に保たれ、真夏の熱気を感じさせなかった。
広い玄関ロビーは真っ白の壁に囲まれ、二階まで高く取られたガラスの明かり取りから、差し込む陽射しで満たされる。
それまで気丈に振る舞っていた朱美は、吹き抜けの玄関で震える深呼吸をした。
「ただいま」
ぽつりと呟き、鼻を啜る音が小さく響く。
父との思い出が蘇ったのだろう。
そして、もう三人で来ることはできない場所に、切ない気持ちが溢れたのだ。
陽奈美も父と来た時のことを思い出した。
記憶の中の父は、家族三人分の大荷物を一手に引き受けてくれていた。
今回は一泊だけれど、あのときは何泊かしたんだろう。
しばらくの休暇に綻ぶ父の笑顔が見えた気がして、胸がきゅっと締め付けられた。
「綺麗にしてもらっていてありがたいわね。お風呂もキッチンもすぐに使えるそうよ」

ボアのルームシューズに履き替え、大理石の床によく映えるアイアンのスケルトン階段で二階に荷物を運ぶ。
二階の廊下は壁一面がガラスになっていて、照明はなくても外の明るさが十分行き届く。
覚えている。
陽奈美が使う部屋は、すぐ左手の扉だ。
最奥の部屋を両親が使っていた。
その手前を左に行くと、バルコニーがある。
一旦荷物を部屋の前に置き、記憶を辿るようにそちらへ行ってみた。
解錠した扉を押し開けたその先は殺風景なコンクリート造りで、柵の向こうに煌めく海が見える。
覚えこそあるけれど、花火を見たあの場所ではない。
やはりここではなかった。
朱美が言っていたように、あれは高成家の別荘だったのだ。
不意に賢正の不機嫌な顔が脳裏を過る。
何も悪いことはしていないはずなのに、なんだか気が引ける。
あの顔を見たからか、朱美はあの見合い未遂から彼の話題を出すことはなかった。

あとは陽奈美が会社で彼を上手くかわしていけば、事件のほとぼりはいつか冷めるだろう。
荷物を部屋へ置いてリビングへ下りると、朱美は誰かと連絡を取っていた。
「先ほど着いたばかりで。ええ、そうらしいですね。今回もだなんて、やっぱりご縁があるんですねえ。はい、こちらはいつでも」
彼女の友人関係はほとんどわからない。
仲良さげに話している朱美を横目に、少しだけ持ってきた食料品を冷蔵庫に入れておく。
食パンにハムとチーズ。
サラダ用のトマトと葉物の野菜という朝食分だけの買い出しを疑問に思った。
夕飯はどうするのかと尋ねた時、朱美は一瞬目を泳がせた。
彼女が隠し事があまり得意ではないのは陽奈美もわかっている。
どこからかシェフを呼ぶつもりで、その贅沢を陽奈美に怒られると思ったのか。
十四年ぶりの別荘なのだから、少しは奮発しても何も言わないつもりだったが、予想は見事に裏切られた。
「それでは、またのちほど」
冷蔵庫の扉を閉じたのと同時に聞こえた、のちほど。

電話の相手とこの後会うつもりなのか。
ああ、そういうことか、と陽奈美は肩を落とす。
誰かここへ来るのか、はたまた彼女が相手方に向かうのか。
まさか男ではないだろうかと、勝手な予想に胸がわずかに軋(きし)む。
せめて父との思い出が詰まったこの場所では、母娘だけの時間を過ごしたかった。
「誰か、来るの？」
悲しみを押し殺し、作りきれているかわからない笑顔で問う。
すると朱美は、待ってましたと言わんばかりに顔を華やがせた。
「十七時くらいになったら、瀧さんが来て下さるわ」
名前を出した朱美は、ほんのり頬を染める。
「た、瀧さん⁉　何で⁉」
想定外の名前に、陽奈美の大声がリビングを震わせる。
あの日自宅まで送り届けてくれた瀧との関係が、まさか進展していたのか。
眩暈(めまい)がするような衝撃に、開いた口が塞がらない。
朱美は飄々(ひょうひょう)と、さらに驚くべきことを言い出した。
「実はあちらの別荘にお呼ばれしているの。夕飯はそちらでご馳走になろうかなって」
瀧との関係は当然反対すべきではない。母親の第二の人生のパートナーが誰であれ、

受け入れる覚悟をしなければいけないと薄々は思っていた。
だが、陽奈美が今一番に危惧するのは、別に想定されることだった。
「待っ、て……あちらってまさかとは思うけど……」
「高成さんのお宅よ。あちらも休暇で、たまたまこっちにいらしてるんですって」
既視感のあるやり取りだ。
「賢正さんもいらしてるらしいから、お話しさせていただけるチャンスよ。先日の誤解も解かなくちゃ」
これは、偶然などではない。
彼女は最初から目論んでいたのだ。
賢正の態度を見て以来、ぱったり何も言わなくなったから油断していた。
朱美もきっと、諦めたと思っていたのに。
彼女の中では、現在進行形で賢正との見合い話は続いていたのだ。
「誤解ってなんの誤解よ。見たでしょ？　あの人めちゃくちゃ怒ってたじゃない。会社でも睨まれちゃうし、気まずいどころの話じゃないんだから」
「照れてるだけよ、きっと」
リアルに口をあんぐりと開けてしまった。
楽観的すぎる。

どこをどう取ったら、あれが照れだと思うのだろう。
明らかな嫌悪を向けられたのに、どんな顔で会えるというのか。
「とにかく、私は無理。行くならひとりで行って」
「じゃあ夕飯はどうするのよ」
「何かデリバリーでも頼むからいい」
「でももうふたりで行くって伝えちゃったから。お食事も用意してくださっていると思うし、お断りする方が逆に失礼よー」
余計なことをしないでもらいたい。
こっちは身バレしているのだ。
滅多にないことだとしても、会社で顔を合わせる身にもなってほしい。
業務以外の部分であんな風に個人的な感情を向けられると、周りになんと思われるかわからない。
好意的ではない彼の態度を見て、やれ迫っただの振られただのと噂になる可能性は十分にあるわけで、そのうち会社で肩身が狭くなるのは想像に難くない。
余程の理由がない限り、ドタキャンの印象が良くなることはまずない。失礼極まりない人間としてのレッテルを首から下げておくか、気まずいだけの存在であるべきかを天秤にかけた。

どちらであってもプラスの要素はなくて、せめてマイナス値の軽度な方にしたかった。
「副社長も振り回されて迷惑なはずだよ。そっちの方が申し訳ないよ。今回はあちらのお顔を立てて行ってもいいけど、本当にもう余計なことしないで、お願いだから」
「余計なことって何よー。ただお食事しましょうって言ってるだけなのに」
つくづくあざとい人だと思う。
持ち前の愛嬌で、悪さをしてもお茶目に見えるからタチが悪い。
溜め息を吐いて頭を抱える。
できる限り賢正との関わりは避けようと決めたばかりだったのに。
彼にとっても迷惑な話だろう。
どうせ顔を合わせるのなら、せめて母の勝手な行動を娘として詫びておこう。
立っているだけで威圧を感じる彼の姿を想像しただけで体が震える。
彼は地位のある人間だ。ひたすら謝罪の態度を示せば事態は次第に落ち着くはずだ。
今後ひとりで生きていく人生のためにも、ここが踏ん張り時だ。
（なんでこんなことに……）
なんだか力の入れどころが違うような気がしながらも、穏やかな日常を過ごせるよう、抱えた頭にその算段をシミュレーションした。

立ち読みサンプル
はここまで

＊

十七時にもなるのに、陽射しはまだまだ激しく照り付けている。
外に出ると、熱を持った空気に囲まれすぐに汗が滲(にじ)んだ。
「お待たせいたしました」
別荘前の駐車スペースに待っていたのは、以前朱美を送り届けてくれたあの黒い車だった。
瀧は、カジュアルなブルーのシャツに薄手のジャケットを羽織り、スラリとした白いパンツで爽やかなオフのスタイルで現れた。
普段のかっちりとしたスーツ姿もかなり二枚目な雰囲気だが、プライベートの彼も母娘で頬を染めるくらいには決まっている。
イケメンのギャップはズルい。
「お荷物お預かりいたします」
「あ、ありがとうございます」
朱美は緊張した様子で、瀧に小ぶりのクーラーボックスを預けた。
中身は彼女お手製のグレープフルーツのジュレだ。
別荘へ到着してから、約束の時間までに見事に仕上げた。